2．研究成果

A．計画研究

課　題　1

計画：1－1

宮城県におけるニホンザルの分布，個体数の現況と歴史的変遷およびその要因についての研究

伊沢　紘生（宮教大）
遠藤　純二（東浜小）
庄司由美子（宮教大）

宮城県下のニホンザルについて，過去の分布の復元や，分布の現状，群れの数や個体数の変動等の調査をこれまで行ってきたが，本研究3年目の今年は成果のとりまとめを念頭に置きつつ，概略以下の調査を行った。

① 県下全域のサル生息地について踏査を実施し，7年前にまとめた「宮城県のニホンザルの群れの分布と頭数」（伊沢・遠藤，1987）の再点検と考察を行った。この結果は『宮城県のニホンザル』第5巻にまとめ公表する予定である。

② より古い時代，すなわち明治時代より以前の県下におけるサルとヒトの関わりについて，古文書の調査，民話・伝承の調査，聞き取り調査等を実施した。この結果は『宮城県のニホンザル』第6巻にまとめ公表する予定である。

③ 前2年間継続した奥新川，二口，川崎の3地域における群れの個体数変動調査を本年度も実施した。この結果は①で記した報告書の中でまとめを行う予定である。

④ 金華山島に生息する5群については，前年度にひとまずの整理を済ませたが，本年度もそれらに関する継続調査を実施した。今回の結果も含め，③と同様に①で記した報告書の中でまとめを行う予定である。

⑤ 金華山ニホンザル個体群の個体数増減に深く関与していることがこれまでのまとめで明らかになった食物について，その生産量を知る目的でシード・トラップを50箇所設置しての資料収集を，前年度に引き続き本年度も実施した。この調査はもうしばらく継続させる予定であるが，同時にこれまで10年間のニホンザルの食物について全資料を現在整理中であり，この食物リストと食物生産量についての分析結果とを併せ『宮城県のニホンザル』第7巻にまとめ公表する予定である。

⑥ 宮城県下でも猿害が大きな社会問題になりつつあり，本年度も相当数のサルが七ケ宿町を中心に駆除目的に射殺された。いずれ本格的に対処しなければならないと考えているが，本年度はとりあえず猿害の発生状況や被害の実態などに関する情報収集を行った。

計画：1－2

熊本県全域にわたる猿害の実態把握
－集団の生息調査を兼ねて－

藤井尚教（尚絅大）

熊本県における野生ニホンザル集団の分布状況は，1982年からの調査でほぼ判明しており，球磨郡川辺川流域と阿蘇郡南外輪山一体が二大生息中心地であり，これら以外に球磨郡の錦町を中心とする大平山一帯と，球磨川右岸の球磨村大槻周辺，八代郡泉村白岩戸に集団が生息している。阿蘇郡一宮町には，捕獲飼育後の脱走集団がいる。

本調査では，県下全域の猿害状況を把握し，これまでの生息資料と比較検討しようとした。

県庁，各県事務所そして各市町村の担当課の協力のもとに1年間の猿害調査をスタートさせた。

相良村では平成3年度に椎茸2,205kg，栗75？kg，タケノコ145kgの被害が報告されたが信頼性は低い。五木村では270万円の栗被害のみが出たがこれもすべてではない。他の市町村でも同じ結果で全体として猿害実態の把握に関してはどの市町村でも熱意は感じられず，結果的には私と県が空回りして，信頼性が低くかつ部分的な猿害資料しか得られず失敗に終わった。

熊本県ではこれまで稲の被害は確認されていなかったけれども，相良村で中の原と高尾野，阿蘇郡高森町冬野の3地域で被害が起きたことは注意を要する。もしこれから稲の被害が増加するなら猿害はさらに難しい問題となるであろう。

詳細な猿害実態が把握できなかったその一方で，猿害調査に付随して，野生ザル集団等の生息状況についての新しい知見となる重要な資料がいくつも得られた。

相良村の四浦西グループが平成3年8月には村境を越えて山江村の大川内や萩の栗園を荒らすようになった。阿蘇郡久木野村では平成3年7月に

は前川グループが行動域を見瀬からさらに西の柏野へと広げたために有害鳥獣駆除の対象となった。阿蘇郡一の宮町の脱走グループは平成3年4月には阿蘇町のいこいの村周辺に一時居着いたが，7月には阿蘇山根子岳の北裾野から半周した南裾野へ現れるようになった。そのほかに球磨郡では錦町の集団が人吉市へ，球磨郡の集団が同じく人吉市へ侵入し被害を増加させている。

上記のように熊本県では行動域の拡大が顕著で，同時に個体数の増加が進行していよう。

計画：1－3

群馬県霧積・妙義山系における野生ニホンザルの分布と生息環境

上原貴夫（長野県短大）

対象地は群馬県碓氷郡松井田町，甘楽郡妙義町，下仁田町である。「長谷部言人　大正12年ニホンザル棲息状況調査」（水戸幸久氏判読注）によると，当時，現松井田町では生息は無く，妙義町では「寡」として生息，下仁田町では「転来スルモノ」と記録され，続く南牧村地域では「伐採区拡大ト共ニ数年后ニハ絶無トナルヘシ」と記録され，いずれにしろそれほど多くない状態で生息や出没がみられていたと考えられる。しかし，現在では，むしろこれら一帯に多く生息・遊動している。先の調査時点とは逆転した状況となっている。

特に松井田町の霧積川流域，湯ノ沢および水谷地区，国道18号線沿い（碓氷峠一帯），同バイパス沿いの遠入，赤坂，明賀，恩賀，下手地区，山麓部の横川，高墓，御所平，五料，梅ケ丘に多い。同地域では1987年，88，89年頃にかけて次第に遊動域が山麓の農地や住宅地等に拡大・定着化してきた。一時期，碓氷峠一帯での遊動が減少することもみられた。妙義山系方面（妙義町，下仁田町一帯）では白雲山と山麓の諸戸地区，金鶏山，上小坂，菅原地区，金洞山，松倉地区，御堂山，中野，半弓，上野，初鳥屋，芝ノ沢地区一帯に遊動する。全般に遊動域は相当に拡大してきた。霧積山系方面では倉淵村や長野県軽井沢町にも出没している。妙義山系方面でも下仁田町では次第に西の長野県佐久市寄りに，また，市ノ萱川を越えた地域に近年出没を広げてきている。

現在の動向については主な生息域である山中において高速道（上信越自動車道，93年供用開始）や高圧鉄塔（群馬－山梨幹線，88年工事開始），北陸新幹線（89年軽井沢起工式）などの大規模工事が相次いで開始されたことや猿害（最初の報告は80年妙義町，下仁田町，82年松井田町）とその対策の進行などが影響していると考えられる。猿害対策としての駆除は過去5年間（86年度～90年度）で松井田町134,妙義町19，下仁田町113，合計266個体である。今後,特に高速道は松井田町において生息・遊動密度の高い地域を分断し，インターチェンジ，サービスエリアも設けられるなど影響も大きいと考えられる。今後の動向を注意深く見つめる必要がある。

計画：1－4

中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態

上田　丞・林　勝治（宇部短期大）
田中　浩（三田尻女子高）
村田　満（三田尻女子高）
吉岡龍太郎（下松工業高）
村崎　修二（猿舞座）
小村　洋子（益田高）
小田　博之・駅場　春樹・藤下　積

今年度はアンケート法により山口県の野生ニホンザルの分布についての調査をした。また島根県で，テレメーター法による調査の検討と群れ数の把握を計画した。結果および今後の調査問題点は次の通りである。

アンケートの結果：山口県の全域を対象として，1987年度と全く同じ方法で野生ニホンザルの分布調査を試みた結果，分布に変化はなかった。アンケートだけの集計であるが，群れ数は40群（1987）から51群（1991）に増加したにもかかわらず，全頭数は変わっていなかった。したがって，一群あたりの平均頭数は30頭前後からおよそ25頭に少なくなっていた。

アンケートの検討：山口県岩国市の野生ニホンザル生息地で全自治会長にアンケート用紙を配付し，1991年10月15日から11月15日の間，ニホンザルと遭遇した自治区の人およびその時のサルの状況の記録を依頼した。

この結果，岩国市には30頭前後の群れが2群，5頭前後の小集団が2グループいることが分かった。